



— 「白い河童と黄色い河童、どっちになりたい？」

まさかそんなことを最初のデートで聞かれると思ってなかった奈月は、驚いてスターバックスラテの
カップを先週買ったばかりの黄色いスカーフの上に落としてしまった。

短めのショートパンツを履いてきたため、肌寒いカフェ店内ではひざ掛けのようにして腿部分に乗せていたのだった。

カップの蓋がついてたので、スカーフにはほんの少しのラテがストローからこぼれた程度で、シミは家に帰ってすぐに洗えば落とせるだろう。

不意に男から出てきた言葉の意味を耳には入れてみたものの、奈月の頭の中では全身を白く塗られた中村俊輔と、おなじく全身を黄色く塗った不精ひげを生やした中年男性が甲羅を背負って
沼で体育座りをしている姿が浮かんだ。

目の前で何食わぬ顔をして、モカフラペチーノを飲んでいる男の発した言葉の意味も、自分がなぜ河童と言われて先の二人を想像したのかも、奈月にはさっぱりわからなかったが、咄嗟に自分の口から出てきた言葉も慮外のそれだった。

「もちろん、チャイナブルーよ。」

ラテのカップの表面で何滴かが集まって大きくなった水滴が、黄色のスカーフに音を立てるように
落ちた。



今年の夏は、どうやら暑くなりそうだ。